

湖東地域を通る名神高速道路は、鈴鹿山脈に沿って南北に延びています。この道路に設けられている多賀サーブスエリアの周辺に、敏満寺という寺院が存在していました。

文献資料には、敏満寺は伊吹山護国寺を開いた三修の弟子である敏満童子が開いた寺院と伝えられ、平安時代前半には開基していたと考えられています。平等院の支配下に置かれていた平安時代後半になると確実な史料にその名が現れ、鎌倉時代には堂宇も整備され隆盛を極めていました。

鎌倉時代初期の建久9年(1198)に、東大寺の再建を進めた重源から舍利寄進塔とともに仏舍利と金銅五輪塔が施入されており、当時寺院の名が広く知られていたことがわかります。また、竹生島の宝厳寺には、「敏満寺西谷西迎院住侶導道坊弘安十一年(一一八八)三月下旬」と刻銘がある銅水瓶が伝えられており、琵琶湖を渡ったつな

がりもあつたとみられます。室町時代には比叡山延暦寺の末寺となり、戦国時代の浅井長政や織田信長による兵火によって衰退したと伝えられています。

この寺院跡が、敏満寺遺跡として知られています。これまで名神高速道路やサーブスエリアの開発に伴う数次にわたる発掘調査により、丘陵上を中心とする僧堂などが居住する僧坊が広がり、その一画に城が築かれていることがわかりました。さらに青龍山の西麓には、敏満寺の鎮守社である胡宮神社、中世の墓地群である石仏古墓跡(国史跡)があります。

僧坊は、斜面地を削り出すなどして造成され、丘陵上や山麓に派生する尾根の上にも長い年月をかけて整備された

発掘された敏満寺



曲輪をめぐる土塁。土塁の上には進入路を見下ろす位置に防御を目的とした櫓台が設けられている

かりました。埋嚢遺構は、染料を入れ染物に使用する施設や、油や酒などの液体を販売するために備蓄しておく施設などと考えられ、寺院が生産や商業にかかわったことを示しています。

胡宮神社の社務所は敏満寺の旧坊福寿院が前身です。神社境内には金堂や大門口のほか、重源が寄進したと伝えられ、鎌倉時代前期の銘がある銅製五輪塔(重要文化財)が残っています。

墓跡は山麓をひな壇状に整地した平坦面上に、50力所程度確認されています。塚のあるものや石組をめぐらすものなど4種類の形状があり、蔵骨器や多数の石造物が確認さ

れました。約1600基もの石仏や五輪塔が並ぶ様子からは、連続と続けられた信仰の姿がうかがえます。

城跡は戦国時代に築かれたもので、丘陵西側の尾根を造成した2つの曲輪が確認されています。曲輪はいずれも大規模な土塁がめぐり、内側の平坦面から最大5メートルの高さを測る強固なものも造られています。なかには直進の進入を防ぐ虎口が設けられるなど、寺院らしからぬ本格的な防御施設がいくつも備わっており、戦いのための十分な対策が施されています。当時の情勢に対応すべく築かれたもので、地域社会で大きな勢力となった寺院が、戦乱のなかに巻き込まれていたことを物語っています。

発掘調査からあきらかになつた敏満寺の姿は、寺院がさまざまな性格を持ち地域社会にかかわっていたことを示しています。サーブスエリアに残される僧坊や曲輪、史跡として保存される墓地群は、その姿を今に伝える貴重な文化財といえます。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 中村智孝)

戦乱に巻き込まれた寺院

戦乱に巻き込まれた寺院